

「リトル・ボーイ 小さなボクと戦争 (LITTLE BOY)」

◆◆◆

2016(平成28)年9月10日鑑賞<シアトル梅田>

監督・脚本・製作:アレハンドロ・モンテヴェルデ

脚本:ペペ・ポーティーロ

ペッパー・フリント・バズビー(リトル・ボーイ)/ジェイコブ・サルヴァーティ

エマ・バズビー(ペッパーの母)/エミリー・ワトソン

ハシモト(日系人)/ケイリー=ヒロユキ・タガワ

ジェイムズ・バズビー(ペッパーの父)/マイケル・ラバポート

ロンドン・バズビー(ペッパーの兄)/デヴィッド・ヘンリー

クリスピニ司祭/エドワルド・ヴェラステギ

ベン・イーグル(奇術師)/ベン・チャップリン

オリバー司祭/トム・ウィルキンソン

2014年・アメリカ映画・106分

配給/東京シアトル

<「リトル・ボーイ」と聞けば・・・>

「リトル・ボーイ」という呼び名を聞けば、それが何を意味するかは私たち団塊世代の日本人なら誰でも知っている。しかし、「先の大戦」すら知らず、「日本がアメリカと戦争したの?」とほざく「A K B 4 8 世代」の若者たちはひょっとして知らないかも・・・?また多くのアメリカ人はその意味を知っていても、あれよあれよという間にアメリカの共和党の大統領候補になったドナルド・トランプ氏からトコトン嫌われているメキシコ人も知らないかも・・・?

案の定、本作を監督し脚本を書いたメキシコ人の新鋭映画監督アレハンドロ・モンテヴェルデは、「リトル・ボーイ」のことを知らなかったらしい。また、1941年12月8日の真珠湾攻撃によって日米間の太平洋戦争が始まる中、アメリカで生活していた日本人や日系アメリカ人が強制収容所に入れられて大きな苦労をしたことを私たち日本人は、『ヒマラヤ杉に降る雪』(99年)(『シネマルーム1』53頁参照)等の映画からよく知っているが、1977年にメキシコで生まれたアレハンドロ・モンテヴェルデ監督はそんな事実も知らなかったらしい。しかし、メキシコでは教わらなかつたそんな「史実」を丹念に調べあげたアレハンドロ・モンテヴェルデは、脚本家とともにオリジナリティと人間愛に溢れた本作の物語を紡ぎあげた。ちなみに、本作の原題は『LITTLE BOY』。それは誰が読んでも「小さな少年」だが、邦題には「小さなボクと戦争」という要らざるサブタイトルが・・・。

<メキシコ人監督なればこそそのアメリカの姿が・・・>

本作の舞台は、太平洋戦争に突入した当時のカリフォルニア州にある、海に面した小さな漁村。1941年当時ホントにこんな漁村があり、そこには本作が描くようなコミュニティがあったのかどうかは日本人の私にはわからないが、それは多分メキシコ人監督アレハンドロ・モンテヴェルデも同じ。したがって、これはきっとアレハンドロ・モンテヴェルデ監督の想像力によるものだろう。また、本作にはアメリカ合衆国への忠誠を誓うことによって収容所から解放される日系人としてハシモト(ケイリー=ヒロユキ・タガワ)が登場し、重要な役割を演じるが、彼が住む家も、古いけれども庭つきの2階建ての典型的なアメリカ風住宅だから、それに注目!狭い長屋が多かったあの時代の日本の住宅とは大違いだ。

他方、本作にはもう一人、8歳の「リトル・ボーイ」ことペッパー・フリント・バズビー(ジェイコブ・サルヴァーティ)に対して大きな影響を与えるオリバー司祭(トム・ウィルキンソン)が登場するが、彼の教会での活動風景や教会に集まる町の人たちの風景もいかにもアメリカ的だ。それ以前に、自動車修理工をしながら、妻のエマ・バズビー(エミリー・ワトソン)、長男のロンドン・バズビー(デヴィッド・ヘンリー)、次男のペッパーとともに幸せに暮らしている一家の支柱たる父親ジェイムズ・バズビー(マイケル・ラバポート)の住宅も芝生があり、白く塗られた木の柵で囲われている当時のアメリカの典型的な住宅だ。

本作のパンフレットにある映画評論家・小野耕世氏の「世代を超える想像力『リトル・ボーイ』が築いた世界の魅力」によれば、こういう風景は「画家のノーマン・ロックウェル(1894~1978)が1940~50年代に描いたアメリカの家の典型」であることを私ははじめて知ったが、多分アレハンドロ・モンテヴェルデ監督もいろいろな資料を集めることでそういう資料をはじめて知り、それをスクリーン上に映し出したのだろう。そういう意味で、メキシコ人監督アレハンドロ・モンテヴェルデが「リトル・ボーイ」をテーマとして紡ぎ出した本作のオリジナルの物語は、いかにも寓話的でいかにも絵画的だから、そんな点にも注目!

<信じさえすれば願いはかなう・・・?>

悪ガキから「小人」という差別用語を使われて虐げられていたペッパーは、自分の身長が伸びないことを心配していたが、そんな心配を吹き飛ばしたのは、相棒としての父親ジェイムズとの仲の良さだった。しかし、偏平足のため入隊審査に落ちてしまった兄のロンドンに代わって父親のジェイムズが戦地に行ってしまうと、ペッパーは孤独に・・・。さらに、ジェイムズがフィリピンで日本軍の捕虜になってしまったという知らせを聞くと、ペッパーの落ち込みようは・・・?

ロンドンとともにベン・イーグル(ベン・チャップリン)のマジックショーに行き、父親と一緒に楽しんでいた時のことを見出しだしたペッパーは少し元気を取り戻したが、そこでアシスタントとして壇上に立ったペッパーは、ベン・イーグルからある不思議な念力を授かることに・・・。しかし、それって一体ナニ? 悪ガキを含む大勢の観客が見守る中、ベン・イーグルから授かれた念力によって、見事にビンを動かすことに成功したペッパーは、「信じさえすれば願いはかなう」と教えられたから、俄然勇気百倍。ボクが一番願っていることは父親のジェイムズを戦場から連れ戻すこと。それなら、そう念じ続ければ、ひょっとして・・・?

<中盤の展開は少し冗長・・・?>

8歳の子供は純真だから、大人の言うことを何でも信用してしまうくらいがある。ペッパーを見ていると、そう思われるかもしれない。それはそれで微笑ましい面もあるが、父親が捕虜になったという西の海に向かって一心に念力を送り続けるペッパーの姿を見ているとちょっとヤバイ・・・? 1260年に『立正安國論』を著した日蓮上人は、その後の蒙古襲来を予言し、「南無妙法蓮華經」を唱えたが、これは時の執権・北条時宗から危険思想とみなされて彼は弾圧されることに。それを考えると、ヘタすればペッパーも・・・。

そんなペッパーを心配し正常な道に戻そうとしたのがオリバー司祭。その結果、本作中盤ではオリバー司祭が、ペッパーに課した「古くから伝わるリスト」の実践がテーマになる。そこには、「飢えた人に食べ物を」「家なき人に屋根を」「囚人を励ませ」「裸者に衣服を」「病人を見舞え」「死者の埋葬を」と書かれていたが、さてその実践は・・・? さらにオリバー司祭はここに、ペッパーの兄ロンドンが憎しみを燃やして襲撃したハシモトについて、「ハシモトに親切を」と書き加えたから、ペッパーはさらにやるべきことが増えることに。

8歳のペッパーがこのリストの課題を黙々と実践する姿が本作中盤の注目点になるが、その展開は少し冗長気味。私にはそう思えたが、さてあなたは・・・?

<ユニークな映像に注目!>

子供は空想力が豊かだから、空想の世界の中ではどんな冒険も可能になる。まして、ペッパーには相性のよい相棒である父親がいたから、ジェイムズと一緒にならどんな危険な冒険も成功させることができていた。それに奇術師ベン・イーグルのマジックが加われば、まさに鬼に金棒。オバマ大統領の「売り」は、就任の際に述べた「YES WE CAN」だったが、現実にそれが果たせなかつたことと比べれば、大違ひだ。

ペッパーはオリバー司祭から難しい課題を押しつけられていたが、ハシモトからはベン・イーグルとはまた異質の「サムライの力」を教えられていた。本作では、それらの映像が実際にユニークで面白い。もちろん、これらの映像はペッパーの空想の世界だけのものだが、それをスクリーン上で具体的な姿として見せられると、なるほど、なるほどと納得してしまうところがミソだ。念することによってビンを動かせることができたのなら、念ずればホントに山を動かすことができるはず。さらに、オリバー司祭から与えられた課題をすべて履行すれば、ホントにジェイムズを戦場から連れ戻すことができるはず。心の底からそう信じ込んでいるペッパーは、ある日「いい加減に目を覚ませ」とわからせたい兄のロンドンから、「それならあの山を動かしてみろ」と言われると、現実主義者、合理主義者のハシモトからの「恥をかくだけだからやるな!」との忠告を無視して、山に向かって念を送り始めたから、アレレ・・・。いくら何でもそんな無茶な・・・。そう思っていたが、何と地面がグラグラと揺れはじめたから、更にアレレ・・・。

本作では、そんな空想力豊かなストーリーと一体となった、興味深い映像に注目!

<原爆投下のシーンをどう解釈?>
1945年8月6日の広島への原爆投下をめぐる物語を描いた映画はたくさんある。最も大切なのはその悲惨さを語り継ぐ映画で、『父と暮せば』(04年)(『シネマルーム4』288頁参照)や『夕凪の街 桜の国』(07年)(『シネマルーム15』261頁参照)等がその代表だ。もし、日本の潜水艦伊507が原爆を積んだアメリカの重巡洋艦インディアナポリスを撃沈していれば・・・、という「歴史上のif」は、日本人には非常に興味深いものだから『ローレライ』(05年)(『シネマルーム7』51頁参照)も興味深い。

しかし、メキシコ人のアレハンドロ・モンテヴェルデ監督にとって、広島に投下された原子爆弾は「リトル・ボーイ」と名づけられていたこと以上の興味はないようだ。広島への原爆投下のシーンは淡々と描かれるだけだ。スクリーン上には、母親から「日本軍に捕らわれているジェイムズの立場は、広島への原爆投下によって悪くなるかもしれない」と聞かされ考え込んでしまうペッパーのシーンが登場するが、これは日本人の思考性とは全く違うことを示すもので、切なくなってくる。さらに、本作で描かれるように、広島への原爆投下を聞いて「ペッパーの念力が通じた」と喜ぶ街の人たちの姿やそれを聞いて「I did it!」と喜ぶペッパーの姿を、世界で唯一の被爆国たる日本人はどう解釈すればいいの?多くの日本人はこのシーンをみて考え込むはずだ。

オリバー司祭が課したリストのうち、1つの例外を除いてペッパーは次々と実践してきた。また、「ハシモトに親切を」と手書きで加えられた課題についても、悪戦苦闘しながらも実践してきた。しかし、「死者の埋葬」については、身近に死者がないければ実践できないから、これだけは未だ手つかずだった。ところが、広島への原爆投下の報を聞いて喜んだり心配していたペッパーの家族の下に届いた報告は、ジェイムズの訃報。本作は丁寧にもフィリピンで捕虜になっていたジェイムズが日本軍から強制労働に従事させられている姿や、敗色濃くなったフィリピンの日本軍基地にアメリカの飛行機が攻め込む姿をリアルな映像で見せてくれるから、それに注目!

私には「捕虜を殺せ」という日本軍の命令がホントにあったとは到底思えないが、そこで見るシーンでは、ジェイムズは日本兵の銃弾に当たって倒れ込んでしまったからやっぱりアウト・・・? 誰もがそう思うはずだ。また皮肉なことに、父親の訃報を聞いてやっと「死者に埋葬を」というリストの課題を実践することができたペッパーの姿も登場するから、その後のストーリーの展開もそれなりに納得できる。ところが・・・?

本作がその後に見せる、あつと驚く結末はあなた自身の目でしっかりと!

2016(平成28)年9月13日記